

二二一ヨ一ク補習授業校

平成二十三(二〇一一)年度

答辞・送辞

## 送辞

在校生代表 LI校高等部一年 金 成美

春、桜の花が咲き始める時期。補習校では、また一年の終わりを迎えています。今日、普段とは違う目的で卒業式に出席している私は、在校生を代表して、卒業生を見送る送辞を伝えるためにここに立っています。

しかし、実を言えば、卒業していく仲間を笑顔で見送る自信はありません。むしろ、先輩が卒業する、ということさえ実感しておらず、私の中では、今日卒業しても春休みが明けたら、現在の高等部二年の仲間はいつでもどおり、また補習校に現れ、いつものテンションでもうひとつの土曜日を過ごしていく、そんな気がしています。

現在のLI校高等部は、一年生が二人、二年生が十人、計十二名のクラスです。高等部に進学した当初は、少しだけこの新たな組み合わせがどこかなく感じましたが、元々、少人数な上に、合同授業も多いため、新入生の私たち二名は自然と高等部に溶け込んでいきました。ホームルームや授業でじゃれ合ったり、昼休みに一緒に座ってお弁当のおかずを交換したり、補習校の外でも先生の自宅でクリスマスパーティーなど、たくさん時間を共に過ごし、いい仲間になりました。

いや、仲間というよりも、補習校で私たち生徒や先生方の間に生まれた絆は、家族のような関係ともいえます。この事に気づいたのはつい最近で、以前は補習校での人々との関係などあまり考えなかったことがありますでした。補習校のほとんどのクラスメイトとは長い付き合いで、いわば、腐れ縁のようなものです。そんな彼らとは、良くも悪くも、色々な出来事を経験しながら、初等部、中等部、高等部と共に過ごしてきました。特に、高等部まで共に進級したとなれば、お互いのことはある程度知り尽くしていて、遠慮などなくなります。知り尽くすと言っても、血液型、好きな言葉など、具体的なことだけではありません。長い月日を共に重ねて知ったさりげない事です。たとえば、日本語を話すときに使う手のジェスチャー、食べることが苦手で、弁当の中身がめつたに空にならないことなど、ごく些細なこと、共に過ごしたから知っているその人独自の特徴です。また、高校生になると全校の最学年として、嫌でも責任を負わなければなりません。補習校とは、様々な経験を共に味わい、深い絆が築かれていく、い

わば「家庭」のような場所です。

先輩は、ずばり、兄や姉の様な存在で、「あーあ、まったく何をしているんだろう。」と思うこともありましたが、心の中では密かに憧れ、頼りにしていたのです。後輩を気遣うさりげない気配りや、校内行事で発揮するリーダーシップは、優しく、頼もしい兄、姉、そのものです。家族とは、父親、母親、兄、姉、妹、弟が集結して初めて成り立つ集団です。一人でも欠けたら、集団のバランスは崩れ、「家族」は成り立ちません。また、家族とは空気のように、居るのが当たり前な存在です。あまりにも当然過ぎて、隣に居るときはその大切さが分からず、自分の前から姿が無くなつて初めて、除々に息苦しくなり、そのありがたみが分かるものです。

今日、その大切な家族がいつぱんに何人も旅立ってしまいます。高等部二年生の皆に旅立ってほしくなくて、最近、私は、「留年しようよ。」と先輩たちにねだることが習慣になりました。それに対して先輩は冗談と受け取ったようですが、私は大真面目でした。たった一人だけでもいいから、もう一年補習校に残ってほしい。しかし、その願いが実現されることは無いと、私は分かっています。

今こうして、思っていたよりもずっと早く一年が過ぎ「さようなら」を告げる心の準備ができる前に、見送らなければなりません。時は止められないし、留年していただくこともできず、卒業式の日には変えられませんが、たとえ、どんなに時間があつたとしても、先輩たちを見送る準備など永遠にできなかつたでしょう。

この一年間、私は先輩たちからたくさん「楽しいこと」や「うれしいこと」をもらいました。だから、今日は、私が「ありがとう」と「おめでとう」を伝え、卒業を祝福する番です。

皆さん、ご卒業おめでとうございます。でも、いつでも戻ってきてくださいね。

答辞（I）

W校初等部卒業生代表 安倍 野映

私が補習校に通った七年間の間には、いろいろなことがありました。そのほとんどがわからなかった思い出です。でも、わからなかった分だけ、私は何かを学んだのかもしれない。

みなさんはどのように考えているかわかりませんが、私は、補習校に通うべきかどうか、毎週疑問に思っていました。幼児部から七年間も通っているのに、勉強がどんどん難しくなっていくって、日本語が上達するどころか、どんどん下手になっていくような気がしました。だんだん現地に慣れてきてアメリカ人の友達が増えてくると、ますます補習校に行きたくなくなってきました。金曜日の夜は、たまった宿題を遅くまでかかって終わらせ、土曜日は朝早く起きなければならず、とても疲れました。友達とのパーティを断らなければならぬこともありました。友達が楽しんでいる間に、なんで私は勉強をしなければならないのだろうと思いました。今でもそう思うことがよくあります。

アメリカに住んでいるのだから、英語だけでも生活していけるのに、なんでこんなにつらい思いをして日本語を学び続けなければならないのだろうか。

それを、毎日のように両親に聞いても、同じ答えしか返ってきません。「大人になったら、補習校を続けていてよかったと思う時が絶対にくるよ。」とか、「二つの文化を知っていると世界が広がるよ。」と同じことを何度も言われても、いらいらするだけで、耳に入りませんでした。将来の事を考えるより、今役に立つ事を考えたいのです。

私の姉は、いつも、「だんだん楽しくなるよ。」と言いますが、私にはそれが当てはまりません。

補習校がなかったら、私の生活はずい分違っていたと思います。その時間があつたら、友達と遊んだり、現地校の宿題を終わらせ、金曜日は一週間の終わりを友達と喜ぶ事ができたでしょう。

私は長いこと補習校に通っていますが、それでも補習校の大切さとか良さを本当に理解できていないと思います。それを中等部で理解するか、高等部で理解するか分かりませんが、一つだけ分かっている事は、今やめて

しまつたら、今まで積み上げてきた事がここで止まってしまうということです。中等部にあまり行く気がしなかったけれど、少しずつでも学び続ける方が良いのではないかと思います。

今日は、私が初等部を卒業しますが、私にとっては、本当の卒業式ではありません。これから中等部に進み、もっと多くのことを学び、楽しい思い出を沢山作つてから、「補習校に通い続けてよかった。」と胸を張って卒業できる日が来ることを楽しみにしています。

七年間、私を暖かく見守ってくださいましたみなさん、本当にありがとうございます。ありがとうございました。

## 答辞(Ⅱ)

ＬＩ校初等部卒業生代表 北川 滯那

六年前、まだ私は一年生になったばかりでした。その六年前からいままでも、私はどれぐらい成長したのでしょうか。いったい何週間、何ヶ月、何時間、補習校に通ったんでしょう。

一年生の時は、ただの百五センチだった身長がどんどん大きくなり、いま、なんと、百四十五センチに成長しました。数えきれないくらい補習校に通った土曜日、でも、もうそんな数なんか関係ありません。ここの補習校で学んだことや、つくった思い出は数で表すことが出来ません。

私はアメリカに住んでいるので、もちろん現地校にも行っています。アメリカの友達もいっぱいいます。いつも聞かれる質問は、「土曜日や日曜日に何をやっているの。」と聞かれます。私は「土曜日には補習校に行くよ。」と答えます。いつも帰ってくる答えは「じゃあ、普通の学校のある日と変わらないね。」と言われて「うん、そうね。」と簡単に言うけれど、心の中ではいつも「いや、全然ちがうよ。」と思っています。私にとっては、補習校はただの日本語や日本語で算数を学ぶ所ではありません。補習校には、それよりもっといろいろ学んできたことがあります。日本語のなり立ちや、漢字の組み立てもあります。算数も日本語で習うと、もっと簡単になることもありました。でも、勉強だけでなく、友達や先生もちがいます。日本の祝いごとや祭もいっぱいあります。こんなに、楽しい補習校でも、むずかしかったり、くやしい思いをすることがありますよね。時には、どうして私だけ？と思う時もあります。でも、こう言う時には、教わってきた先生に言われたことを思い出します。「中高までがんばってね。途中でやめるとこうかいするよ。」と言ってくれた先生方を思い出すと勇気がわいてきました。私は両親や先生方に言われた言葉を信じて、がんばってきました。補習校は、私が選んだ未来への道です。だから六年生まではぜったい通いたい、というも思っていました。私が、今ここに立っているのは、ただ補習校を六年間通っていただけではありません。いっしょに思い出をつくってくれた友達、「もう、やめたい。」と止まってしまった時にははげましてく

れた先生方。そして、毎日勇気くれた家族。そのみんなのおかげです。この六年間、いっしょに通って来た友達の中には、もう来年いない友達もいるかもしれません。でもここにいるクラスみんなに会えて本当によかったです。四月から私は中等部に進みます。みんなもそれぞれ自分の道に進むと思うけれど、自分の信じた道を歩みましょう。私もがんばります！

ＬＩ校を卒業するに当たり、もう一度、心をこめて言いたいと思います。六年間ありがとうございました。

### 答辞(Ⅲ)

LI校中等部卒業生代表 古庄 カンナ

中学校最後の年、日本では、東北地方を襲った地震と津波で、かつてない多くの死傷者ができました。被災者の置かれた状況をニュースで知るたびに沢山のことを思い知らされます。このことは、私に、「人の一生は、本当に何が起ころか分からない。」ということをお教えてくれました。だからこそ、今日というこの日が、すごく輝いているように強く感じます。そして、今まで一緒だった仲間がかけがえのない大切な存在だと実感させられました。

そのかけがえのない仲間である、LI校中等部三年は、今日この学校を卒業します。今思うと、私達が一緒に過ごした時間があつという間に過ぎていったように感じます。

私達は、中学一年生の時からとても賑やかなクラスで、いたずらして怒られることも多く、先生方や先輩方を困らせたことが度々ありました。一人のクラスメートが冗談で、「皆一列に並んで今までやっていたはずを一人一個ずついえば、俺たち何周できるんだろう。」本当にそのとおりだと思います。学年があがると共に、私たちのチームプレイもとても上手になってきました。いたずらなどが先生にばれないようにお互いかばったり助け合ったりすることもありました。中学生に成り立ての頃は、まだまだまりのあるクラスとは言いづらい状態でしたが、中三の今では、お互い尊敬し合える仲間に成長できたような気がします。いつもクラスを楽しく盛り上げてくれたり、皆を笑わせたりする仲間がいて私はとても恵まれていると思います。

いつも皆で過ごした昼休みのカフェテリアはとても楽しい思い出の場所です。中三の仲間だけではなく、高一の先輩や中一、中二の後輩たちとも一緒にテーブルを囲み、お弁当を食べました。終わったら、必ずジムでバスケットというのが習慣でした。みんなが夢中になると、バスケットの間にか違うスポーツに変わり、レスリングやサッカーになってしまいうこともありました。クラスの男子はお昼のこの時間のために大抵、半ズボンで登校し、いつもものすごく盛り上がりました。

でも、楽しいことばかりではありませんでした。現地校の勉強に追われ

補習校の宿題が終わらなくて、苦しかったり、漢字が読めず大変だったりすることもたくさんありました。でもこれらの苦しさを乗り越えたことで少しずつ自信が持てるようになりました。この大変だった経験が今では自分の宝物になりました。

在校生の皆さん、次は、あなた方がこの補習校の伝統を築き上げていく番です。また、あなた方自身で一生に一度しかない中学校生活を存分に楽しんでください。

私達を温かく見守り続けてくださった先生方。土曜日の補習校をこんなに充実して過ごすことができたのも先生方の支えや励ましのおかげです。そして何より、素晴らしい指導を下さった先生方。その想いに触れ、感謝したことが何度あったことでしょう。先生方の教えてくださったことを無駄にせず、これからも自分を磨いていきたいと思えます。

そして何よりも一緒に過ごしてきた仲間たち。これから成長していくなかでこれほどの仲間に出会うことができるかと思うくらい、私はこの仲間が大好きです。この仲間と日々を送って私は本当に幸せだったと自信を持って言えます。最高の思い出、ありがとう。私たちの歩む道は、違いかもしれないけど、共に過ごした時間はかけがえのない時間でした。皆に会えてよかった。本当にありがとう。

そして私達のあらゆる日常生活の中でいつも変わらない愛情で支え助けてくれ、喜び、悲しみを一緒に分かち合ってくれ私達を補習校に通わせてくれた家族。毎日が楽しく過ごせるのは家族の存在があつてのことです。今まで本当にありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願ひ致します。どうか私たちが進んでゆく道を温かく見守ってください。

LI校中等部三年の卒業生を代表し、ここでもう一度心から本当に感謝の言葉を申し上げ、答辞とさせていただきます。

本当にありがとうございました。

## 答辞(Ⅳ)

W校中等部卒業生代表 木原 慧人

今、僕は補習校中等部卒業の日を迎え、ここに今まで過ごしてきた長い道のりを振り返っています。両親と三学年上の姉に手を引かれて緊張しながら、玄関前の入学式と書かれた立て看板の前で写真を撮った日が思い出されます。それからの十年間、両親に継続は力なりと言われ続けて今日が来ました。

長い初等部に比べ、三年間の中等部はあっという間に過ぎました。補習校にある皆さんの行事に僕はいつも積極的に参加して楽しんできました。中等部にもいろいろな行事がありました。毎年クラスのみんなや家族で早くから計画して用意し、少しでも売上を多くあげ、有効に使ってくれる団体に寄付をする行事です。今年も東日本大震災の義援金として日本総領事館に届けましたが、その前の二年間はアフリカの村に井戸を掘るウォータープロジェクトに寄付をしました。僕たちの二年間の寄付でアフリカのどこかの村に井戸が一つ掘られて、何百人もの人々が清潔な水を飲めているはずですよ。アメリカや日本では大したことがない金額の寄付でも、ほかの国では大変役に立つことを実感しました。のみの市の売り上げをみんなで教える時の充実感は格別でした。クラスの団結心も、のみの市と一緒に経験することに強まってきました。

僕は最近、補習校の生徒のつながりが卒業式で最後でないことを知りました。去年の春、高等部を卒業した姉が年末に、大使公邸での補習校同窓会に招かれたのです。一緒に卒業した同級生や先生方と行ってみたいところ、ずっと年上の先輩方も見えていたそうです。考えてみると、創設から五十年の間の卒業生の数はすごい数に達しているはずですよ。同窓会を作ればちよつとした学校の同窓会並みの組織になるはずですよ。同窓会員は皆補習校と現地校を両立させた努力家ばかりで、その自信と根性できつと各分野で成功している方が多いのではないのでしょうか。同窓会を作り、アメリカと日本にいる卒業生同士が交流できるようになったら素晴らしいと思います。高等部に進んだらその実現の可能性を調べてみようと思っています。

僕は四月から高等部に進みますが、これからますます現地校の勉強、音

楽、スポーツとの両立が大変になるでしょう。でも先輩たちが全てにがんばっている姿を見てきたので、僕もがんばれると思います。高等部では生徒会活動に、より一層力をいれるつもりです。そして一番の目標は、大人の社会で通用する日本語をしっかりと学び、身に付けることです。

今日卒業するぼくたち中学三年生十四名中、三分の二以上が幼児部、または一年生から補習校に通ってきました。僕たちは皆、どんなに現地校が忙しくて、日本語の学習が苦しくて、やめないうちまで来たのです。二つの学校に通うのは、皆それぞれ本当に大変なことでした。しかし、それを成し遂げられたのは、なんといつても僕たちの両親の、時には優しく、時にうるさい叱咤激励があったからです。今日の日を迎えられて小学校卒業の時より少し大人になった僕たちは、両親に感謝しています。高い授業料を払い、毎週早起きをしてお弁当を作り、送り迎えをし、金曜日には「宿題やったの？」と確認してくれて本当にありがとうございます。おかげさまでぼくたちは今日、晴れて日本という義務教育を終えることが出来ました。

この十年間僕たちを支えてくれた家族、そしていつも我慢強く指導してくださいました先生方、お世話になった学校の方々、本当にありがとうございます。僕たちが大人になって振り返った時、絶対に忘れることの無い思い出の日々を与えてくださいました。そしてともに頑張った三年一組のみんな、二つの学校を両立させたことを思えば、これからは僕たちは何でもできるはずですよ。継続は力なり、僕たちはまさにこの言葉の証ですよ。もしここまで補習校を続けていなかったら、アメリカで生まれ育った僕が、自信をもって日本語を使い、日本の文化と心を十分に理解することはなかったと思います。すごく大きな力を補習校の十年の継続で付けたと僕は信じています。

四年前、僕はあのへんに座っていて、姉の高等部の卒業式をぼーっと見ていた。せつかくの日曜日なのに、なんで朝早く起きて僕に関係のない卒業式に付き合わなくてはいけないんだと思っていた。あれから四年、僕はここで答辞を読んでいる。「なんで俺が？」と正直思った。僕の同級生はそれぞれが皆大きなドラマを経て今日この日を迎えている。誰もが答辞を読むのにふさわしい。そんな彼らの代表として答辞を読むことを僕は誇りに思う。

「ダメ学年。」小学校の時、僕達の学年はそう呼ばれていた。アリゾナとテキサスで補習校に通っていた僕は、そんなクラスに小学二年のときに転入してきた。いつも騒がしくて、宿題をやつてこない子も多いし、現地校の物を勝手に触って壊し、授業中も平気で英語を話し、席に座らないで机の下でイモムシごっこをしている子もいて、補習校と言うより動物園のようだった。授業態度がひどすぎて参観日以外授業が進まなかった。そこで、僕達の学年は「日本語能力」を基準にして二つのクラスに分けられることになった。ふたクラスを一組、二組と呼べばよかったのに、なんと、レギュラークラス、アドバンスクラスという名がつけられた。それ以来、僕達の学年は水と油のような状態になってしまった。

この「日本語能力別クラス」の影響は、中学になってクラスが一つになつても続いた。ひとつのクラスなのに主に日本語を話す女子グループ、主に英語を話すグループ、どちらにも入れないその他の男子グループという三つの世界が出来上がっていた。気がつくとなつ一つの世界の周りには、見えないバリアがあり、バリアを越えて他の世界に入れない、自分のいる世界からも出られないようになっていた。三つのグループは決して交わらなかつた。これは僕達にしか分からない補習校生活の傷跡だ。

そんなクラスが、高校に進学するとあら不思議。人数が減つたせいもあつてか、僕たちの間にあつたバリアがだんだん消滅しはじめた。小学校時代に比べると、今は、三つの団子がすっかりタケのくしに刺さつており、周りは甘いみつに囲まれた完璧なみたらし団子になっている。激しい仲間割れを乗り越えた我々十人は、この絆をきつと一生忘れることはないだろ

う。

フワフワしたシュークリーム、シャリシャリしたカキ氷、プルプルしたプリン。そう、誰もが好きな甘い甘いスイーツ。口に入れるとろけ、口いっぱい甘い甘みが広がって、口の中が一瞬だけ楽園になる食べ物。小学生の僕にとつて、補習校は甘いスイーツだった。鬼ごっこしたり、ドッジボールをしたり、友達とゲラゲラ笑つたり、気楽に行く場所だった。中学に進学しても、精神年齢は小学生の時とほぼ同じ。でも、高校に進学すると補習校の味は苦さへと変わった。生徒会は例年より忙しいし、現地校も忙しいし、運動会は雨ふるし、負けるし、球技大会は蒸し暑いし、負けるし、ボーリング大会では岡本先生に負けるし。でも、この苦さを味わつたおかげで、補習校生活にはさまざまな味が存在することに気が付いた。仲間と一緒にいるだけで味わえるほのかな甘さ、せつかく二時間かけてやつた宿題を家に忘れてくるすっぱさ、朝チヨチヨイと車の中で勉強しただけで受けた期末テストが手元に戻つた時のしょっぱさ、そして先生に叱られる辛さ。今、色々な味が蘇る。

今日、これで僕は補習校高等部を卒業する。でも、僕は「卒業」とは何かの終わりではなく、何かの始まりだと思つている。十代の僕達にとつて、人生の本番は、これからがスタートだ。この先、道は暗くて辛いかもしれない。社会に出て傷つけられたり、笑われたりするかもしれない。思ひどおりに進めないかもしれない。でも、何があつても、下を向かず、あきらめず、自分の信じる道を前へ前へと歩んでいきたい。

福山雅治が歌う中島みゆきが作詞した「ファイト」。この曲は僕の心にしみる。

暗い水の流れに打たれながら、魚たち のぼつてゆく

光つてるのは傷ついてはがれかけた鱗が揺れるから  
いつそ水の流れに身をまかせ 流れ落ちてしまえば楽なのにね  
やせこけて そんなやせこけて魚達 のぼつてゆく

勝つか負けるかそれはわからない それでもとにかく闘いの  
出場通知を抱きしめて あいつは海になりました

ファイト！闘う君の歌を、闘わないやつが笑うだろう  
ファイト！冷たい水の中をふるえながらのぼってゆけ

先生方、保護者会の皆さん、両親、先輩達、後輩達、漢字テスト、ユウ  
タ、マリコ、エミ、シヨウタ、ハルカ、ナツコ、リナ、ピカ、アンディー、  
そして補習校・・・十二年間の土曜日をありがとう。



今ここに立ち、思い出すことがあります。それは二年前、中三の卒業式の会場に向かう道。このところの春らしい天気とはぜんぜんちがう光景が広がっていました。そこは前日の大嵐で倒れた木々にふさがれ、沢山の道が通行止めになっていました。いくつもの回り道をして、やっと会場にたどりついた朝でした。家に帰ると停電、町は混乱、現地校は一週間も休校になったのです。あの日、無事に中等部を卒業できた事は本当に奇跡的だった、と何度も何度も思いました。その場面だけが切り取られた絵のように鮮やかに頭に浮かんだことでした。実は今も同じ気持ちになっています。補習校という大嵐の中を潜り抜け、よく今日の卒業式を迎えられたな、と感じています。あの卒業式会場にたどり着いた道のりと同じように、今日高等部の卒業式にたどりつくまでの私達の道のりは決して平坦ではありませんでした。立ちほだかる苦難の前に、これが限界、これ以上は無理、と何度も補習校への熱意が消えかけたり、真つ暗な中をただただ通うだけの時期もあったのです。

今から十二年前、日本から引越してきたばかりの私が幼児部の生徒になった日、ドキドキワクワクとした気持ちで教室に飛び込みました。友達もすぐにでき、カレー作りや運動会など楽しいことが一杯で、それはそれはきらきらと輝く日々でした。でも、その輝きはある意味私の目をくらませました。こんなに楽しい補習校が時と共に茨の道に変わってゆくなんて、誰が想像できたでしょう。そうなのです、私はそれから十二年も続くことになるマラソンの出場権を手にして、そうとも知らずに元氣一杯走り出した六歳の女の子でした。

三年生頃までは楽しく走り続けられました。でも、現地校との両立のつらさに我慢できなくなった四年生のある土曜日の朝、私はついにある行動に出ました。自分の部屋に鍵をかけ、閉じこもったのです。「死んでも、補習校なんか行かない」と布団にくるまっていました。必死の抵抗でしたが母と父による説得と巻き添えを食らった兄弟の怒りの声に三十分ほどで車には乗せられました。その日からそんな土曜日が何回も何回も何回も続くことになりました。補習校に行く意味を見失い、熱意も消えかかっ

ていったのです。でもその火を灯し続けてくれたのはクラスの友達でした。渋々、とぼとぼと教室に入る私を毎週明るいうちと笑顔で迎えてくれた友達がいたおかげで私はかろうじて走り続けることができたのです。

そんな友達に支えられ、補習校を自分の居場所として意識することができるようになった中等部。そこを経て、自分の意思で高等部に進むことにはしたものの、その後も土曜日はスポーツの試合や現地校の行事に加え、ボランティアやSATの試験、補習校を欠席する日も多い上、平日は現地校の宿題、クラブ活動、大学進学のエッセーと、忙しく、時間との戦いはますます過酷で激しくなりました。土曜の授業中、頭は聞いていてもまぶたが閉じていたことも何度もありました。それでも、補習校に来ることに意味を感じて、それをできる自分に満足もしていました。

そんな中、ある日の小論文の授業中、私にとってショッキングな出来事が起こりました。「余命告知の是非」についてディベートをしていた時のことでした。頭の中にはこれが私の意見という考えがはつきりと浮かんでいました。でも、手を挙げて発言し始めると、私の口からは自分でもあまり意味のよく分からない、曖昧な言葉ばかりがもごもごと出てくるだけだったのです。その時、私は気付いてしまいました。日本語力が足りない。言いたい事はこんなにあるのに、それを話す力がない。自分の力が落ちていくということに愕然とし、惨めで、恥ずかしい。ああ、いやだ。そう強く思いました。

けれど、逆にこれが私の転機になったのです。ああ嫌だ、だから、このままでは嫌だ、という気持ちになったのです。その日から、残り少ない補習校でも、自分が思っていることを、それにふさわしい言葉で言える様になろう、という思いで、日本の名作を読む、新聞の記事を読んで作文を書く、など努力しました。それをきっかけに、次第に私の補習校への思いと日本との絆が強くなっていったのです。毎年締め切り前夜に徹夜で必死に書いて提出する硬筆展。今年の冬休みが最後の挑戦でしたが、真夜中、誰も起きていない部屋で、心を静かにしてきれいな字を書いていると、気持ちがいいなあ、楽しいなあ、としみじみ思え、ああこれが最後なんだな、と胸の奥がつーんとして悲しくもなりました。それを悲しい、と感じることのできる私は、やっぱり日本人だなあ、とも思えました。

今日ここで、私の補習校生活は終わりますが、日本と私の絆は一生続き

ます。これは、マラソンをやっと完走した私に補習校がくれた大事な勲章です。初等部の皆さん、中等部の皆さん、どうかこれだけは覚えておいてください。アメリカという地で私達が美しい日本の言葉や文化に浸れることがどんなに幸せなことか。私は、今になって初めてこの事実気がつきました。でも皆さんにとつては、まだ遅くないのです。今どんなにつらくても、努力は必ず報われます。これは十二年間、補習校という嵐の中、走り続けて、やっと分かったこと、そして、私が皆さんに一番伝えたいことです。

最後に、これまでお世話になった先生方、本当にありがとうございます。いい加減な態度の時はいつも真剣にしかってくれました。今日私達が卒業できるのは先生方のおかげです。また、陰で支えてくださった、補佐の方々、保護者会の皆様、そして毎週土曜日、お弁当を作ってくれ、全力で私を部屋から引きずり出してくれたお父さん、お母さん、心から感謝しています。さあそして、共に卒業するクラスの皆―くじけた時に何回、皆に救われたことでしょうか。リーダーとして魅力にあふれる、気配りのすばらしい生徒会長の将。優しい気持ちでクラスのムードをやわらげてくれる高等部のお母さんの存在のあいら。いつもふざけているようで実は秀才の副会長のギャグ。思ったことを正直に発言できる、しかもすごい音量で高等部を盛り上げてくれるもえ。皆、ありがとう。皆がいたからこそこれまでられたんだよ。最後まで、一緒に嵐をくぐり抜けてきた五人。この補習校で築いた絆は、一生続くよ。「自分を信じて一歩進めば何かつかめるさ、少し夢を大きくして、君は一人じゃないから。一生に一度の宝物。寂しいけれど、涙拭いて、旅立とう。また会える日まで、流れ星に願った、飾らない心でずっといようよ。また会える日まで、輝く星に誓うよ、出会えたことを忘れない。」ありがとう皆、ありがとう補習校。